慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・B・ウラム著(奈良和重訳)『未完の革命：工業化とマルクス主義の動態』
Sub Title	A. B. Ulam, The unfinished revolution : an essay on the sources of influence of Marxism and communism
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.10 (1969. 10) ,p.124- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19691015-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た。だが、この科学のための、内容のある独創的なドイツ語の著作は結局――ヴァイトリングのほかは――『二十一ボーゲン』にのせられたヘスの諸論文と、『独仏年誌』のなかのエンゲルスの『国民経済学批判大綱』しかないことになる。『独仏年誌』のなかでは、私も同様に、本稿の基礎的な最初の諸要素をまつたく一般的なしかたで略示した」と。ここにいうヘスの論文とは「社会主義と共産主義」「行為の哲学」などである。

さて、著者が結論として述べているように、マルクスの思想もまさに時代の産物であり、以上の多彩な同時代の思想家の影響を逃れなかつた。しかし、彼はその誰よりも俊敏であり、彼の思想的偉大さをいささかも減じていないのである。『ドイツ・イデオロギー』のなかの言葉を引こう。

良心あるドイツ人の胸のなかにある一種の自己陶酔的な国民感情を呼びさます哲学上のこの誇大自己宣伝の本質を正当に評価し、この少壮ヘーゲル派運動全体のみみつちさと地方的偏狭さ、とりわけこれらの英雄どもが実際になしとげた業績とこれについての誇大なイリュージョンとのあいだの悲喜劇的なコントラストを如実に描き出すためには、このスペクタクル全体をドイツ以外の立場から改めてとつくりと眺めて見ることが必要である。

マルクスはそれをやつてのけた後の時代になつてみれば、さながら青春時代の回想にも似た、崇高なものを打ち砕こうとするあの知的残忍さをもつて。

（奈良　和重）

A・B・ウラム著（奈良和重訳）『未完の革命―工業化とマルクス主義の動態―』

本書は Adam B. Ulam, *The Unfinished Revolution: An Essay on the Sources of Influence of Marxism and Communism*, New York: Random House, 1960 の全訳である。著者ウラムは、ハーバード大学教授として社会主義思想史、ソヴェト外交史を講ずるかたわら、同大学ロシア研究センターの研究員として精力的な研究活動を続けている中堅クラスの政治学者である。

さて、本書は、そのサブ・タイトルからも分るように、工業化とマルクス主義との関係を解明しようと試みた点に特色がある。この問題の解明へと著者を駆りたてたものは、「マルクス主義がある社会において生き、かつ適切なものであるのに、他のところでは社会主義と共産主義が取るに足らない党派、もしくは知識人集団の信条にとどまつているのはどうしてか」（著者まえがき）という極めて常識的な疑問であつた。マルクス主義が高度に工業化された西欧にではなく、工業化と近代性をめざして暗中摸索しつつある非西欧社会に主として勝利を得、影響をおよぼしているのはなぜか？　この常

識的な疑問からひきだした著者ウラムの解答は、しかしながら非凡である。すなわち、著者は、マルクス主義を工業化・近代化のイデオロギーとして把握し、「前工業的社会から近代的、少くとも部分的に工業化された社会への移行の決定的な時点には、マルクス主義がある意味でその社会の自然的イデオロギーとなり、その問題に対して最も魅惑的な解決となる」（一一頁）と鋭く洞察する。移行期の社会においてマルクス主義が「自然的イデオロギー」となるのは、いつたいなぜか？　著者によれば、それはマルクス主義が「科学と機械化の崇拝とそれらが人類を変革する力に対する無限の信仰」、「そしてそれとまつたく正反対なもの――機械時代の無情さと破壊性に対するプロテスト」という、移行期のムードの本質を反映しているからであり、かつ、この時期の「大衆はもとより知識人や科学者に対しても．．彼等自身の思想と感情を整合し、統合する何ものかとしてあらわれるから」にほかならない（七～八頁）。かかる意味において、工業化・近代化に到達しつつある社会にとつて「マルクス主義的」時期の体験は必然であり、他方、高度に工業化された社会にとつてはマルクス主義は触発さるべきなにものも持たない存在なのである。これは、マルクス主義の見事な相対化である。ここでは、マルクス主義は絶対論であることを完全に否定され、一種の相対論として受けとめられているのである。

たしかに、「どのような社会理論でも経済学体系でも、その歴史的・社会的環境を超越できない」（三五頁）のであり、マルクス主義もまたその例外ではない。したがつて、マルクス主義を研究対象としてとりあげる場合、その「歴史法則」が妥当であるか否か、その経済理論が正当であるか否か、といつた点に論議を集中するよりも、マルクス主義もまた時代の子であつたという前提にたつて、マルクスがその「時代」をいかに理論化したか、その時代的状況（マルクス主義的状況）はどこに再生し、または再生しつつあるか、という角度から問題に接近する方が、生産的であろう。本書のもつ価値は、なによりもまず、マルクス主義との対話における著者のこうした姿勢に求められねばならない。

ところで、前述のごとく、科学と機械化の崇拝、それへの無限の信仰、および機械時代の無情さと破壊性へのプロテストこそ、一九世紀前半期西欧のもつムードであつたのであるが、著者はこれを、工業主義と反工業主義というタームで表現し、工業主義はマルクス主義的論理の基礎であり、反工業主義はマルクス主義的情緒の基礎であると述べている。自己破壊的な資本主義にとつて代わるべき新しい工業的秩序、生産力の無限の発展を保障すべき社会主義的生産関係の到来を措定した点で、マルクス主義の論理はたしかに工業主義的であり、また、農村の荒廃、非人間的な労働強化等から生ずる農民、労働者の怨恨と苦痛を革命のエネルギーに転化させようとする点で、マルクス主義は反工業主義的情緒に基礎をおいているといえよう。

この工業主義の論理と反工業主義の情緒は、一八四〇年代の西欧では容易に整合されえた。しかしながら、こうした「マルクス主義的状況」は、一八五〇年以後のイギリスの場面からは永遠に去つた

が、それは、「デモクラシー原理を漸次に政治に拡大してゆくこと、および社会立法と労働組合の承認という基礎的原理をきわめて漸進的かつ初歩的に採用することが急進的気質を緩和させ、そして工業の発展と一般的生活水準の上昇がこのプロテストからその主な反工業的性格を剝奪した」（九三頁）からであつた。

反工業主義こそは無政府主義的ムードの母であるがゆえに、こうした反工業主義の稀薄化は、状況を「非マルクス主義的」にしていく。深化・拡大するデモクラシー、および成長する労働組合主義を伴つた工業主義の発展は、社会主義から革命的熱狂を奪い去る。労働運動は経済主義に傾斜し、祖国をもたないはずの労働者は、国家の存在を容認し、国家の枠内における自己の救済を考えるにいたる。「社会主義の性質というものは工業主義・プラス・デモクラシーの論理的な延長であり実現にすぎない」とするフェビアン社会主義（一六五頁）がその後イギリス社会主義の支配的潮流となつたのは、そのゆえである。

こうして、工業主義が反工業的プロテストのムードから脱脚しつつ発展すると、マルクス主義者の側においてすら、「歴史の力は労働者を革命的階級とはしない、労働者の自然発生的な組織は彼等を革命にではなく、経済および職業上の改善のための闘争へと導いてゆく」という、一種の諦観的認識が生じてくる。ベルンシュタインの「修正主義」はまさしくこうした認識を土台とするものである。これに対して「正統」マルクス主義者レーニンは自然発生性への拝跪を拒否し、「労働者を革命的マルクス主義へ強制的に転向させることを信ずる」（一九二頁）。「レーニンおよびその同時代人にとつて、マルクス主義とは革命を意味する」のであり、「彼等が主として関心を抱いていたのは、政治的革命への特定の途としてのマルクス主義の意味である」（一九三頁）。

レーニンが、「労働者を革命的マルクス主義へ強制的に転向させる」ための装置＝党を通じてロシア革命を成功させえたのは、当時の「ロシア帝国において工業は躍進的に成長しつつあつたにもかかわらず、工業化にとつて必要な政治的要素は一八四八年のフランスあるいはイギリスにおけるよりも遙かに欠けていた」（一九四頁）からであつた。しかし、革命の装置である党は、もし「一九〇五年の革命後にロシアに真の立憲的かつ自由な政治生活が生じていたとしたら、ほとんど生存不可能であつたろう」（二〇二頁）。

右のような考察から、著者は、「レーニン主義的党というものは、移行段階にある社会に特有な条件のもとにおいて――労働者の階級利益が……まだ一定の型に固まつていないところ、工業化と近代化の過程が、『共産党宣言』をマルクスが書いた当時の西欧において、それが及ぼした混乱と当惑とのあらゆる効果をあたえつつあるようなところにおいて――実践可能である」（二〇四頁）こと、および、レーニンはオリジナルな教義をロシア的条件に適応させたという意味で、マルクス主義を社会工学として利用した最初の人物であること（二一八頁）を指摘している。

さて、レーニン主義がロシア革命を勝ちとつたあと、マルクス主義における工業主義的性格は、ロシアでは、スターリン主義に体現

された。スターリン主義は、全体主義の一枚岩的な機関に鍛えあげられた党を通じて、「唯物論的でプラグマティックな心理をもち、党の命令と宣伝に自動的に反応する」ような新しいソヴェト的な工業主義的人間を創造しつつ、マルクス主義的工業化を急テンポで推進していつた。第一次五ヵ年計画にみられるごとく、「十九世紀前半のイギリスにおいて社会的および経済的諸力の計画もなく方向づけもない寄せ集まりが成し遂げたものを、マルクス主義的国家は、強制と計画化によつて遂行しようと努力しつつあつた。マルクス主義のイデオロギーは、その祖先たる自由主義がそうであつたよりもなおいつそう自己意識的に、工業化と科学の技術であることが明らかにされた」。十九世紀前半のイギリスの場合とは違つて、「今度は工業的価値を中産階級にさりげなく教化するのではなく、これらの価値を社会主義の名のもとに社会全体に対して強制的に押しつける」(二四三頁)のである。要するに「スターリン主義の意味は、マルクス主義の論理の、革命的精神に対する勝利なのだ。すなわち、強権的な国家と、工業的および科学的性格をもつた社会の創造ということである。……ロシアにおけるマルクス主義は、最初は革命の技術として、ついで工業化と近代化の技術として、その性質を示したのである」(二五一頁)。

かかる意味において、レーニン主義のみならず、スターリン主義もまた、マルクス主義の社会工学化であるといえよう。さらに、かかる意味においてマルクス主義(およびレーニン主義、スターリン主義)が初期工業化のイデオロギーである以上、それは、高度に工業化したソヴェトに対してもはや不適切であろう。したがつて、そこではイデオロギーの腐食化、日常生活の非イデオロギー化が、当然の現象として発生する。しかし、だからといつてマルクス主義はその生命力を喪失しはしない。第二次大戦後にいたつてアジア、アフリカ、ラテンアメリカは、ようやく工業化の初期段階にさしかかつた。したがつて、ここにこそ著者のいう「マルクス主義的状況」が再生しつつある。こうした世界史における工業発展の不均等性のゆえに、マルクス主義的革命は依然として「未完の革命」である。

ここで本書についての感想を要約しておこう。さきにも述べたごとく、本書で展開されたウラムの所説は、マルクス主義のまことに見事な相対化である。それは変動期におけるイデオロギーの巨大な役割とその機能を巧みに説明しつつ、工業社会への移行期におけるマルクス主義の社会工学的な生命力の源泉を余すところなく指摘している。

たしかに、現代の後進地域に対するマルクス主義の影響力には、とうてい無視しえないものがある。たとえば、筆者の専攻するアフリカ地域においても、マルクス主義的社会主義の潮流の存在は、はつきりとみてとれる。だがしかし、このことは、ウラムのいう「マルクス主義的状況」が厳密な意味でそこに存在しているのだということを必ずしも裏書きしてはいない、と思う。つまり、そこには自然発生的な「工業主義への信仰」があるわけではなく、また体制をつき動かすほどの「反工業主義的情緒」が横溢しているわけでもな

い。そこにはたしかに「工業化の初期的段階」が現出しつつあるが、それは社会的諸力が自然に生みだしたものでなく、民族主義的感情を媒介として人為的に生みだされたものである。これら後進諸地域には、先進工業諸国が三〇〇年かかつて成し遂げたことを一世代のうちに成し遂げねばならないという強い欲求がある。その意味で、これら地域では工業化はその出発点から意識的である。したがつて、マルクス主義のもつ社会工学的側面はこれら後進諸地域にヨリ強くアピールする。ヨリ厳密にいえば、マルクス主義の現代における生命力の源泉は、そのスターリン主義的側面にある、ということになる。すなわち、一枚岩的な党と全体主義的な機構を通じて、工業化の途を真一文字につき進んでいくという側面に、である。したがつて、「共産主義と自由主義との闘争の一側面は、思想の競争、しばしば誇張して呼ばれるような《人間の魂のための闘争》にあるのではなく、むしろ発展のテクニックの闘争、世界的な広がりをもつた社会・経済的な技量の闘争である」（三二一頁）という著者の指摘は、まつたく正当である。ただ、そういう認識があるなら、それがもつぱらスターリン主義的側面に体現されていること、そして、現在後進地域が「スターリン主義的状況」にあるがゆえに、マルクス主義が生命力を保持していることを、ヨリ明確に示すべきであつたであろう。

さて、いずれにせよ、本書はそのユニークな発想法のゆえに、マルクス主義研究に一紀元を画したといつてよい。また本訳書の文体は流麗であり、かつ正確であつて、このユニークな研究を本邦に紹介するうえで、十分にその役割をはたしえている。著者ならびに訳者に対して敬意を表して、この拙い書評を終えたいと思う。（慶大法学研究会刊　昭和四十三年　三四四頁　一五〇〇円）

（小田　英郎）